

悲嘆と諷諭 — 「古詩十九首」と「新樂府」 —

山 田 尚 子

はじめに

『白氏文集』（前後続集本）七十一巻のうち、『白氏長慶集』に該当する巻五十までの部分においては、詩（韻文）を大きく古体と今体（近体）との二つに分ち、さらに古体詩を諷諭・閑適・感傷の三つに分類する。この四分類は、元和十年（八一五）十二月に書かれた元稹宛の書簡「与元九書（元九に与ふる書）」の中で白居易自身の発案として説明された分類を採用したものと考えられる。この書簡の中で白居易は「窮則独善其身、達則兼濟天下（窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を濟ふ）」という『孟子』を淵源とする「兼濟」・「独善」の発想に言及し、諷諭・閑適の二分類がこの「兼濟」・「独善」にそれぞれ基づくもので、ここに収められた諷諭詩・閑適詩が自分自身の「道」を示すものとして重要であるとした。

諷諭詩の中には、白居易が左拾遺の職にあつて諫官として製作した「新樂府」五十篇がある。⁽¹⁾ 本稿では、特に「新樂府」の序に見える「古詩十九首」への言及を起点として、「新樂府」において、悲哀の感情を詠ずることと諷諭詩であることが結びつく、その結びつきについて考えてみたい。

一、新樂府序の本文―「古詩十九首」への言及―

『白氏文集』卷三・卷四に諷諭詩として収載された「新樂府」五十篇の篇首には「序曰」として、作成した白居易の意図が説明されている。ここでは序のうちで各篇の体裁について説明した、以下の記述に注目したい。

首句標其目、古十九首之例也。卒章顯其志、詩三百篇之義也。⁽²⁾（首めの句に其の目を標^あげたことは、古^{いにし}への十九首の例なり。卒^{おは}りの章に其の志を顯^{あらは}すとは、詩三百篇の義なり。）

傍線部分にある「古十九首」は、『文選』に収められる「古詩十九首」だと考えられる。ただし、「古十九首之例也」の七字は、神田本（神田喜一郎氏旧藏嘉承二年藤原知明書写本）や、時賢本（書陵部藏元亨四年藤原時賢書写本）など、日本の旧鈔本にのみ存し（ただし高野本には「也」字無し）、紹興本（南宋紹興初年刊本）、馬元調本（明万曆三十四年馬元調校刊本）、那波本（元和四年那波活所（道円）跋刊古活字本）などの刊本には無い。⁽³⁾ この点について太田次男氏は、掲出した「首句標其目、古十九首之例也。卒章顯其志、詩三百篇之義也」が、後続の「其詞質而俚、欲見者之易論也。其言直而切、欲聞者之深誠也」などとある箇所を含め、「五字で提示し、七字でこれに応ずるという」隔句対で作られていることを指摘し、元來の序の本文にも旧鈔本に同じくこの七字

が存していたものと推定した。さらに、旧鈔本の「秦中吟十首」に題のない本文が見出されることなどを根拠として、現存の「新樂府」（神田本など）で各篇に冠せられている題および題序が、新樂府序の書かれた時点では存在せず、「古詩十九首」のそれぞれが題を持たずに首句を以て呼ばれていたのと同様に、「新樂府」においても首句にその題が示されるのみであったことを推定している⁽⁴⁾。

日本の旧鈔本の多くに「古十九首之例也」があることからすれば、元来、新樂府序にこの七字があった可能性が高い。一方、太田氏のいう、題（および題序）が各篇首に無い「新樂府」は現存しない。また、「古詩十九首」の各作品が第一句によって名付けられたのとは異なり、「新樂府」の各篇においては、題が先にあつて第一句が作られた可能性がある⁽⁵⁾。ただし、題（各作品の呼称）と第一句とがほぼ一致している点については、「新樂府」と「古詩十九首」とが合致する。

翻つて掲出の本文を見れば、「卒章顯其志、詩三百篇之義也」とあるのは、『毛詩』（『詩経』）における詩の意義、すなわち大序に以下の如く述べられる「風刺」「諷諭」の意図を「新樂府」各篇の終わりに表すことをいうものだと考えられる。

上以風化下、下以風刺上。主文而諷諭。言之者無罪、聞之者足以戒。故曰風。（上は以て下を風化し、下は以て上を風刺す。文を主として諷諭す。言ふ者は罪無し、聞く者は以て戒しむるに足れり。故に風と曰ふ。）白居易は、『毛詩』を襲ひ、風刺・諷諭を意図して作成した詩（韻文）を諷諭詩と呼び、それこそ、詩人によって進んで作られるべき、そして社会において重んぜられるべき詩だと考えたのであつた。そもそも諷諭詩の作成とは、経書としての『毛詩』の意義を、自らの手で実現しようとする試みに等しいものだといえる。従つて、新

樂府序に「卒章顯其志、詩三百篇之義也」というのは、「新樂府」が『毛詩』を襲うことを表明したものとして理解できる。そして、新樂府序における『毛詩』への言及を以上のように理解するならば、「古詩十九首」について、ここに言及される意図や背景を考察する必要があるのではないか。

本稿では、「首句標其目、古十九首之例也」という本文をめぐって、この本文を認めることができるのか、認めるとすればその背景をどのように考えればよいのか、この二点について考察する。これらの問いは、旧鈔本の本文の妥当性の問題と関わる一方で、白居易が「古詩十九首」をいかに受容したか、という問題とも繋がるものである。

「古詩十九首」は、前漢から後漢にかけて製作された、作者不明の五言古詩のうちの十九首が「古詩十九首」と名付けられ、『文選』卷二十九「雜詩」に収められたものである。後掲の『詩品』の記述からも窺われるように、『文選』が編纂された当時においては、数十首（少なくとも五十九首）の古詩が存しており、蕭統（五〇一～五三二）は、こうした古詩の中から十九首を採り、『文選』「雜詩」の冒頭に配したものと考えられる。鍾嶸（四六九頃～五一八頃）の『詩品』では、古詩を「上品」に置いて高く評価した上で、以下のように述べる。⁽⁶⁾

其体源出於國風。陸機所擬十四首、文溫以麗、意悲而遠。驚心動魄、可謂幾乎一字千金。其外、去者日以疎^{うるは}、麗^{うるは}しく、意は悲しくして遠し。心を驚かし魄を動かし、一字千金に幾^{ちか}しと謂ふべし。其の外、「去る者は日に以て疎し」などの四十五首は、哀怨多しと雖も、頗る総雜と為す。

この記述によれば、古詩の源流は『毛詩』の「國風」にあるという。また、古詩のうち、陸機が擬古詩を作った

十四首については特に高く評価できるが、それ以外の、「去者日以疎」などの四十五首については、哀怨の情が豊かだとはいっても、粗雑な感じがするという。

陸機（二六一～三〇三）の擬古詩のうち、十二首が『文選』卷三十「雜擬」に収載されるが、そのうちの十一首は「古詩十九首」に含まれる詩に擬したものである。ここで「去者日以疎四十五首」を部分的に評価する指標となつている「哀怨」は、『毛詩』大序の「乱世之音怨^レ以怒。其政乖。亡国之音哀^レ以思其民（乱るる世の音は怨みて以て怒れり。其の政乖^{そむ}ければなり。亡びなんとする国の音は哀しみて以て其の民を思へり）」に拠るものだと考えられる。⁽⁷⁾ すなわち掲出の記述からは、『詩品』において、古詩は『毛詩』『国風』の系譜上に位置するものと考えられており、その評価においては『毛詩』大序の記述が指標とされていることが窺われる。

このように「国風」から古詩への流れを想定するとき、しばしばこの流れは抒情詩の系譜と捉えられ、特に「古詩十九首」については、その抒情性が注目される。⁽⁸⁾ 徐陵（五〇七～五八三）が編纂した『玉臺新詠』には「古詩」として八首を載せるが、そのうちの四首が「古詩十九首」に見え、また、同じく『玉臺新詠』に枚乗の作として載る「雜詩」九首のうち、八首が「古詩十九首」に見える。『玉臺新詠』が男女間の情愛を詠じた詩の集成として編纂されたことからすれば、ここに古詩が収載されたのは、詩の抒情的な側面によってのことだと考えられる。

ただし、経書としての『毛詩』の意義は、それぞれの詩を諷諭（風刺・諷諫）として解釈した場合のその解釈の仕方にある。⁽⁹⁾ 言ってみれば、『詩』に込められたはずの諷諭の意図は、「毛伝」「鄭箋」といった注釈によってこそ明確になるものであろう。そこで注目してみたいのは、「古詩十九首」に附された李善・五臣（呂延濟・劉

良・張銑・呂向・李周翰)による注である。⁽¹⁰⁾以下、節を改め、「古詩十九首」の李善・五臣両注の検討を行い、その作業を通じて「古詩十九首」が諷諭的に解釈される、その具体的な様相を確認してみたい。

二、「古詩十九首」注釈における諷諭的解釈

「古詩十九首」⁽¹¹⁾の其一(行行重行行)は、夫の遠行により離別した夫婦の思いを託した作品として知られる。

1・2 行行重行行、与君生別離。
行行として重ねて行行す、君と生きながら別離す。

3・4 相去万余里、各在天一涯。
相ひ去ること万余里、各おの天の一涯に在り。

5・6 道路阻且長、会面安可知。
道路は阻^{へだ}てて且^また長し、会面^{いっしょく}安んぞ知るべき。

7・8 胡馬依北風、越鳥巢南枝。
胡馬は北風に依り、越鳥は南枝に巢^{すく}ふ。

9・10 相去日已遠、衣帶日已緩。
相ひ去ること日びに已に遠し、衣帶日びに已に緩^{ゆる}ぶ。

11・12 浮雲蔽白日、遊子不顧反。^(返)
浮雲白日を蔽^{かき}す、遊子顧^{かへり}み反らず。

13・14 思君令人老、歲月忽已晚。
君を思ひて人をして老いしむ、歲月忽ちに已に晩^くれぬ。

15・16 棄捐勿復道、努力加餐飯。
棄^すて捐^すて復た道^いふこと勿^なし、努力して餐飯を加へよ。

第二句の「生別離」について李善注は『楚辭』九歌、少司命的「悲莫悲兮生別離(悲しみは生きながら別離するより悲しきは莫し)」を引き、別離の悲しさを詠んだ表現と解する。

李善・五臣の両注が諷諭の句と解するのは、第十一句・第十二句の「浮雲蔽白日、遊子不顧反」^(返)である。この

句について李善注は、「浮雲之蔽白日、以喻邪佞之毀忠良、故遊子之行不顧反也（浮雲の白日を蔽すは、以て邪佞の忠良を毀るに喩ふ、故に遊子の行きて顧反せざるなり）」と説明するほか、以下の三書を引き、この二句を諷諭的に解釈する。

① 文子曰、日月欲明、浮雲蓋之。（文子に曰はく、日月明ならんとすれば、浮雲之れを蓋ふ。）

② 陸賈新語曰、邪臣之蔽賢、猶浮雲之障日月。（陸賈新語に曰はく、邪臣の賢を蔽すは、浮雲の日月を障るが猶し。）

③ 古楊柳行曰、讒邪害公正、浮雲蔽白日。（古楊柳行に曰はく、讒邪 公正を害し、浮雲 白日を蔽す。）

以上の記述から、李善注では、「白日」は賢臣（忠臣・良臣）を、「浮雲」は邪臣を喩えていうもので、「浮雲蔽白日」は、邪臣が賢臣の行いを阻む意を表す、と解釈されていることが窺われる。

一方、こうした李善注の解釈に対し、五臣（劉良）注は「白日喩君也。浮雲謂讒佞之臣也。言佞臣蔽君之明、使忠臣去而不返也（白日は君に喩ふるなり。浮雲は讒佞の臣を謂ふなり。言ふところは佞臣 君の明を蔽し、忠臣をして去りて返らざらしむるなり）」とし、「白日」は君主を、「浮雲」は佞臣（ことば巧みに主君にこびへつらう臣下）を喩えたもので、「浮雲蔽白日、遊子不顧反」は、佞臣が君主を惑わし、忠臣を中央から追いやって復讐させない状況を表す、と解する。すなわち先述の李善注では、臣下の境遇を問題にはするものの、必ずしも君主については言及しないのに対し、五臣注では、明確に君主と臣下の関係において句を解釈する。また、五臣の張銑は、この詩全体について「此詩意、為忠臣遭佞人讒譖、見放逐也（此の詩の意、忠臣佞人の讒譖に遭ひしが為に、放逐せらるるなり）」ともいう。こうしたことから、李善注に比して五臣注は、より積極的に詩全体を

諷諭として解釈しようとしており、しかもそのように解釈するにあたり、君主と臣下との関係に重きを置く傾向にあることが窺われる。

実は、五臣注におけるこうした傾向は、「古詩十九首」中のほかの詩についても見るができる。さらにも一首、以下に掲げる其二（青青河畔草）について検討し、この点を確認してみたい。

1・2 青青河畔草、鬱鬱園中柳。 青青たる河畔の草、鬱鬱たる園中の柳。

3・4 盈盈楼上女、皎皎当窗牖。 盈盈たる楼上の女、皎皎として窓牖に当たれり。

5・6 娥娥紅粉粧、織織出素手。 娥娥として紅粉粧ひ、織織として素手を出だす。

7・8 昔為倡家女、今為蕩子婦。 昔は倡家の女^{むすめ}為り、今は蕩子の婦為り。

9・10 蕩子行不歸、空牀難独守。 蕩子行きて歸らず、空しき牀独り守り難し。

この詩は、かつて倡家^{けいけ}におり、今は蕩子（久しく遠方に出かけたままの男）の妻となった女性の心情を描いたもので、そうした見方は、李善注によっても裏付けられるものだと考えられる。

五臣（張銑）注は、この詩全体について「此喻人有盛才事於暗主、故以婦人事夫之事託言之（此れは人の盛才有りて暗主に事ふるに喩ふ、故に婦人の夫に事ふるの事を以て託して之れを言ふ）」とし、有能な人物が暗愚な王の臣下となることを美しい女性が蕩子の妻となることに喩えて詠んだものとする。さらに、それぞれの句において、以下のように五臣による注が見え、詩全体に対する張銑の解釈を支えていることがわかる。

〔第三句・第四句、呂向注〕 盈盈不得志貌。皎皎明也。楼上言居危苦。当窓牖言潜隱伺明時也。（盈盈）は志

を得ざる貌。「皎皎」は明なり。「楼上」は危苦に居るを言ふ。「当窓牖」は潜かに

隠れて明時を伺ふを言ふなり。）

〔第五句・第六句、李周翰注〕 娥娥美貌。織織細貌。皆喻賢人盛才也。〔「娥娥」は美の貌。「織織」は細の貌。皆な賢人の盛才に喩ふるなり。〕

〔第七句・第八句、呂延濟注〕 昔為倡家女、謂有伎藝未用時也。今為蕩子婦、言今事君好勞人征役也。婦人比夫為蕩子。言夫從征役也。臣之事君亦如女之事夫。故比而言之。〔昔為倡家女〕は、伎藝有れども未だ用ひられざる時を謂ふなり。〔今為蕩子婦〕は、今君の好みて人を征役に勞するに事ふるを言ふなり。婦人夫を比して蕩子と為す。夫の征役に従ふを言ふなり。臣の君に事ふるは亦た女の夫に事ふるが如し。故に比して之れを言ふ。〕

〔第九句・第十句、李周翰注〕 言、君好為征役不止、雖有忠諫、終不見從。難以獨守其志。（言ふところは、君好みて征役を為して止めず、忠諫有りと雖も、終に従ふことを見らず。以て独り其の志を守ること難し。）

以上の注の記述から、其二（青青河畔草）における五臣注では、蕩子とその妻との関係を、暗愚な君主とその有能な臣下との関係に置き換え、正しからざる君主のあり方を暗に提示する、いわば諷論の詩として詩全体を解釈しようとしていることが窺われる。

如上、其一（行行重行行）、其二（青青河畔草）について、君主と臣下との関係に重きを置きつつ、詩全体を諷論的に解釈するという五臣注の傾向が確認できる。そして、こうした傾向は、其四（今日良宴会）、其五（西

北有高楼」、其十（迢迢牽牛星）、其十二（東城高且長）にも窺うことができる（其五については次節に詳述）⁽¹²⁾。

また、其八（冉冉孤生竹）は、第一句・第二句「冉冉孤生竹、結根泰山阿（冉冉たる孤生の竹、根を泰山の阿に結べり）」について、李善注が「竹結根於山阿、喻婦人託身於君子也（竹根を山阿に結べるは、婦人の身を君子に託するに喩ふるなり）」とするのに対し、五臣（李周翰）注は「冉冉漸生進貌。此喻婦人貞潔如竹也。結根泰山、謂心託於夫如竹生於泰山之深也（「冉冉」は漸く生進するの貌。此れ婦人の貞潔にして竹の如くなるに喩ふるなり。根を泰山に結べるは、心を夫に託すること竹の泰山の深きに生ずるが如きを謂ふなり）」という。両注は、第一句・第二句を女性の結婚を喩えたものと見る点で共通するが、五臣の李周翰の注は「冉冉孤生竹」に婦人の貞潔を読み取る点に特徴がある。

呂延濟・劉良・張銑・呂向・李周翰の五名が注を附した「五臣注文選」三十巻は、開元六年（七一八）九月十日、玄宗に献呈された。呂延祚が玄宗に上った「進集注文選表（集注文選を進むる表）」では、李善注について「忽發章句、是徵載籍、述作之由、何嘗措翰。使復精覈注引、則陷於末学、質訪指趣、則歸然旧文。祇謂攪心、胡為析理（忽ちに章句を發きて、是れを載籍に徴す、述作の由は、何ぞ嘗て翰を措かん。復た注引を精覈せしむることは、末学を陷る、指趣を質し訪はしむることは、旧文に歸然たり。祇に謂ひて心を攪る、胡為れぞ理を析たん）」と、正確な引証を重視しすぎることが作品理解の弊害となつてゐるといい、そこで訓釈による附注を求めて五臣注を作らせたのだという⁽¹³⁾。五臣注は、晩唐の李匡父撰『資暇録』以来、記事の杜撰さが指摘されるなど、総じて高い評価は得ていない。とはいふものの、五臣注の編纂方針に照らせば、玄宗の頃にそれぞれの作品がどのように解釈されていたのか、あるいは解釈されるべきであつたのか、当時の解釈の典型を顕著に示すもの

として、五臣注を捉え直すことができるのではないかと考える。記述の正確性や解釈自体の是非は置くとして、五臣注を通じ、古詩に対して詩全体を諷諭的に解釈する、いわば古詩を諷諭の詩と解する解釈が行われていたことを窺うことができる。

翻って、旧鈔本「新樂府」の序に「首句標其目、古十九首之例也」とある本文に改めて注目すれば、ここに「古十九首之例也」とある、その背景として、「古詩十九首」を諷諭的に解釈する如上の見方を想定することができる。「古詩十九首」から「新樂府」への影響という側面からは、「新樂府」五十篇のうちの第四十九「鵝九劍」(『白氏文集』卷四、0173)に「不如持我決浮雲、無令漫々蔽白日(如^しかじ我れを持て浮雲を決して、漫々として白日を蔽^かさしむること無からむには)」とあるのが注目される。この表現は、前に言及した、「古詩十九首」のうちの其一(行行重行行)の第十一句「浮雲蔽白日」に基づくものと考えられる。「鵝九劍」には、掲出の本文に続けて「為君使無私之光及万物、蟄虫照蘇萌草出(君が為に私^{わたくし}無きの光をして万物に及^{およ}びして、蟄虫照蘇して萌草出でしめよ)」とあり、従って、ここで白居易は李善注よりむしろ五臣注に従い、「白日」は君主を、「浮雲」は佞臣を、それぞれ喻えた表現として用いていると考えられる。また、「新樂府」ではないものの、諷諭詩の第一、「続古詩十首」其十(『白氏文集』卷一、0074)にも、「浮雲蔽白日」に基づき、君主を「白日」に、佞臣を「浮雲」に喩える、同様の発想が見える。こうしたことからすると白居易は、恐らく五臣注に従って、「浮雲蔽白日」を君臣関係のあり方を示す諷諭の句として理解していたものと推測される。「古詩十九首」と「新樂府」との間の表現上の影響関係については(『文選』の注釈の問題も含め)、より精査を要すること言うまでもない。とはいふものの、「古詩十九首」には諷諭の詩として解釈されるものがあり、諷諭詩としての「新樂府」が、『毛

詩」と「古詩十九首」との双方に準じて作られたと考えれば、少なくとも旧鈔本の「古十九首之例也」という本文を序本来のものと認めることが可能となろう。加えて、白居易が「古詩十九首」の発想や表現を作詩に用いるにあたっては、五臣注の解釈に従うところが大きかったことを推測することができる。そこで考えてみたいのは、「古詩十九首」の抒情詩としての側面が、如上の諷諭的な解釈といかに関わるか、という点についてである。以下、節を改め、この点を述べたい。

三、悲嘆から諷諭へ

「古詩十九首」は、総じて悲哀（悲嘆・慨嘆）の感情を詠んだ抒情詩とされ、既述のように、「国風」から古詩への流れを想定するとき、しばしばこの流れは抒情詩の系譜として捉えられる。それでは、こうした抒情詩としての側面と、注釈における諷諭的な解釈とは、いかに関わるのだろうか。この点について、「古詩十九首」の其五（西北有高楼）を例に考察してみたい。

- | | | |
|------|--------------|---|
| 1・2 | 西北有高楼、上与浮雲齊。 | 西北に高楼有り、上 ^{かみ} 浮雲と齊 ^{ひと} し。 |
| 3・4 | 交疏結綺窓、阿閣三重階。 | 交疏 綺窓を結び、阿閣 三重の階あり。 |
| 5・6 | 上有絃歌声、音響一何悲。 | 上に絃歌の声有り、音響 ^い 一に何ぞ悲しき。 |
| 7・8 | 誰能為此曲、無乃杞梁妻。 | 誰か能く此の曲 ^{つく} を為る、乃ち杞梁が妻なる無からんや。 |
| 9・10 | 清商隨風發、中曲正徘徊。 | 清商風に随ひて発す、中曲正に徘徊す。 |

11・12 一彈再三歎、慷慨有余哀。

一たび弾じて再び三たび歎く、慷慨して余りの哀しき有り。

13・14 不惜歌者苦、但傷知音稀。

惜まず歌ふ者の苦しむことを、但だ傷む知音の稀なることを。

15・16 願為双鳴鶴、奮翅起高飛。

願はくは双鳴鶴と為りて、翅を奮ひて起ちて高く飛ばん。

この詩は、西北の高樓の上から聞こえて来る「絃歌声（琴などの絃楽器を弾きながら歌う声）」に込められた悲哀の情を詠んだものである。詩中、第五句・第六句に「上有絃歌声、音響一何悲」と詠まれる樓上の絃歌の悲哀を特に顯著に表現するのは、第七句・第八句の「誰能為此曲、無乃杞梁妻」であろう。この中に見える「杞梁妻」について、李善・五臣の両注はともに、それが戦国時代、斉の杞殖（梁は字）の妻をいうものであることを指摘する。杞梁の妻は戦死した夫の亡骸に取り付き、城壁のもとで昼夜を問わず泣き続け、その十日後には城壁が崩れたという（『列女伝』貞順伝）。また『琴操』によれば、「杞梁妻嘆」なる曲があったという（以下に李善注所引の『琴操』の本文を引く）。

杞梁妻嘆者、齊杞梁殖之妻所作也。殖死。妻嘆曰、上則無父、中則無夫、下則無子、將何以立吾節。亦死而已。援琴而鼓之、曲終遂自投淄水而死。（杞梁妻嘆は、斉の杞梁殖が妻の作る所なり。殖死す。妻嘆じて曰はく、上には則ち父無し、中には則ち夫無し、下には則ち子無し、將た何を以てか吾が節を立てん。亦た死せんのみと。琴を援きて之れを鼓し、曲終はりて遂に自ら淄水に投じて死す。）

すなわち本詩において、樓上の「絃歌声」の悲哀は、夫を失って嘆く「杞梁妻嘆」の悲哀に重ねられているものと考えられる。

李善注は、この詩全体について「此篇明高才之人、仕官未達、知人者稀也（此の篇は高才の人、仕官未だ達せ

ず、人を知る者の稀なることを明らかにするなり」とする。李善のこうした見方は、本詩を諷論的に解釈するものだと考えられる。ここで李善注が「知人者稀」とするのは、第十四句に「但傷知音稀」とあるのに対応するものだろう。恐らく李善注では、第十四句「但傷知音稀」の「知音」を、悲哀の込められた音を聞き分ける能力を持つ聞き手と解し、さらにこの「知音」を、「知人」すなわち「高才（優れた才能）」の持ち主を見分ける能力を持つ者をそのように喩えた表現として解したのであろう。その結果、本詩を「高才」が仕官することの難しさを述べた詩と解したものと考えられる。すなわち李善注においては、絃歌の歌い手と聞き手とに別の人物が想定されており、第十三句で「不惜歌者苦」というときの「苦」は、「杞梁妻嘆」に同じく夫を失った女性の苦しみを表すものとされ（この箇所李善注には前掲の『琴操』の記述が引用されるのみ）、これに対して第十四句「但傷知音稀」というときの「傷」は、楼上からの絃歌を聞く者（恐らくは男性）の思いを表すものとされたのであろう。さらに、最後の第十五句・第十六句の「願為双鴻鵠、奮翅起高飛」について、李善注は『楚辞』九懷、陶璜に「傷時俗兮溷乱、将奮翼兮高飛（時俗の溷乱を傷み、将に翼を奮つて高く飛ばんとす）」とあるのを引いており、この二句が、混乱状態にある世間から飛び立とう（抜け出そう）とする、絃歌の聞き手の願いであることを暗示する。

五臣注は、詩全体について「此詩喻君暗而賢臣之言不用也（此の詩は君暗くして賢臣の言の用ひられざるに喩ふるなり）」（李周翰注）といい、前節で言及した其一（行行重行行）、其二（青青河畔草）と同様に、本詩を、君主と臣下との関係を喩える諷論の詩と解する。まず、第一句・第二句「西北有高樓、上与浮雲齊」について「西北乾地、君位也。高樓言居高位也。浮雲齊、言高也（「西北」は乾の地、君の位なり。「高樓」は高位に居る

を言ふなり。「浮雲齊」とは、高きを言ふなり」（李周翰注）と説明して西北の高樓を君主の地位（を暗示するもの）と解する。さらに第五句・第六句の「上有絃歌声、音響一何悲」について、「言樓上有絃歌亡国之音。一何悲也、謂不用賢、近不肖而国將危亡、故悲之也（言ふところは樓上に絃歌亡国の音有り。「一何悲」、賢を用ひず、不肖を近づけて国將に危亡せんとす、故に之れを悲しむを謂ふなり）」（張銑注）と注し、樓上の絃歌を、君主にその言が用いられない賢臣の嘆きの曲、ひいてはそうした君主のあり方が国を滅亡させるという意味での亡国の音楽だと解するものと考えられる。その上で、第七句・第八句の「誰能為此曲、無乃杞梁妻」では、「既不用直臣之諫。誰能為此曲、賢臣乃如杞梁妻之惋歎矣（既に直臣の諫を用ひず。「誰能為此曲」、賢臣は乃ち杞梁が妻の惋歎するが如し）」（呂延濟注）といい、そうした賢臣の嘆きの曲である絃歌の悲痛を「杞梁妻嘆」の悲痛に重ねること、その悲痛の度合いを表現したものと解する。そして、第十三句・第十四句「不惜歌者苦、但傷知音稀」に至って、「不惜歌者苦、謂臣不惜忠諫之苦、但傷君王不知也（「不惜歌者苦」は、臣忠諫の苦を惜まず、但だ君王の知らざることを傷むを謂ふなり）」（呂向注）とし、嘆きの歌を歌う賢臣は「忠諫」をいう苦しみを厭わず、ただ君主がそうした忠諫の言を理解しないことを苦しむことをいうものとする。すなわち五臣注では、「知音」を、賢臣の諫言を聞き分け、それを良いものとして聞き容れる、理想的な君主のあり方をいうものとして解し、「傷知音稀」は諫言が聞き容れられないことに苦しむ賢臣の思いを述べるもの解する。そして、最尾の第十五句・第十六句の「願為双鴻鵠、奮翅起高飛」に至り、「君既不用計、不聽言。不忍見此危亡、願為此鳥高飛於四海也（君既に計りごとを用ひず、言を聴かず。此の危亡を見るに忍びず、願はくは此の鳥と為りて高く四海に飛ばん）」（劉良注）といい、亡びゆく国を見るのに堪えられない臣下の、国を離れたいという願いを述べる

ものと解釈する。

以上のように、李善注と五臣注とは、前者が必ずしも君主の賢愚を問題としていないのに対し、後者は諫言を容れないという暗君のあり方を問題にしていることが明らかであり、両者の解釈は全体として異なっている。しかしながら、人材の登用や君臣関係など、社会問題を主題とする諷諭の詩として本詩を解釈しようとするその姿勢において、両者は共通していると考ええる。ここで注目したいのは、両者における諷諭的な解釈が、表出された悲哀・悲嘆の感情に対するそれぞれの解釈と密接な関わりを持つ、という点である。

本詩において楼上の絃歌は、第八句で「杞梁妻嘆」になぞらえられるほか、第五句・第六句で「上有絃歌声、音響一何悲」と表現され、第十一句・第十二句では「一彈再三歎、慷慨有余哀」という。傍線部分の語彙から顕著に窺われるように、悲しみや嘆きを表すための表現が盛んに用いられ、楼上の絃歌が持つ悲嘆の情が強調されていることが確認できる。また、このように強調された悲嘆が、第十三句・第十四句に及んで「不惜歌者苦、但傷知音稀」とされ、強調された悲嘆の情はもとより、さらに「知音稀」であることの苦しみが大きいことが述べられる。既述のように、李善注においては、絃歌の聞き手の「傷知音稀」という嘆きを「傷知人稀」の嘆きと解釈し、全体を「此篇明高才之人、仕官未達、知人者稀也」と解釈する。一方、五臣注においては、楼上の絃歌を、君主にその言が用いられない賢臣の嘆きの曲と捉え、「傷知音稀」についても、暗君に対する賢臣の嘆きと解釈し、全体を「此詩喻君暗而賢臣之言不用也」と解釈したものと考えられる。すなわち本詩における李善・五臣の両注による諷諭的な解釈は、詩中に描かれた悲嘆の情をいかに解釈するか、という点に大きく左右されるものであり、悲嘆の情についての解釈と諷諭的な解釈とが互いに連動し、整合性をもつように行われていることを

確認することができる。

そして、こうした悲嘆と諷諭との関係は、前節の考察で、五臣注によって詩全体が諷諭的に解釈されていることを指摘した詩において、特に顕著にそれを窺うことができる。例えば、其一（行行重行行）についての「此詩意、為忠臣遭佞人讒譖、見放逐也」（張銑）という解釈は、男女の悲嘆の背景として、佞人によって讒譖された忠臣が放逐され、ともに暮らしていた女性と生き別れになったことを想定して成されたものであろう。また、其二（青青河畔草）に対する「此喻人有盛才事於暗主、故以婦人事夫之事託言之」（張銑）という解釈は、かつて倡家におり、今は蕩子の妻となつて独り寝を余儀なくされた女性の悲嘆を、暗主に仕えた有能な臣下の思いをなぞらえたものとして解釈したことによつていよう。

「古詩十九首」の注釈における諷諭的な解釈は、描かれた悲哀・悲嘆の感情について、あるいはその背景となつてゐる現象や問題を顕在化させながら、あるいはそうした感情を生み出す状況を想定しながら、あるいはそうした状況からさらに別の状況を連想しながら、表出された悲嘆を何らかの形で解釈することで成されている。このような悲嘆の表出から諷諭的な解釈への道程は、表出された悲嘆がいかに諷諭と結びつくかという道程に等しいものである。そして、詩全体を諷諭的に解釈しようとする傾向の強い五臣注において、こうした道程をより明確に見出すことができるといえよう。

四、「新樂府」における悲嘆と諷諭

前節までの考察により、「古詩十九首」の注釈（特に五臣注）において、詩全体を諷諭的に解する（古詩を諷諭の詩と解する）解釈の仕方が行われていたことを指摘でき、さらに、そのように解釈された詩において、表出された悲嘆が諷諭的な解釈へと帰着していく様相を確認することができたと考える。

そして、ここで白居易の「新樂府」五十篇に目を移せば、その中に、あらかじめ悲嘆の情が表出され、その嘆きを解釈することで諷諭へと結びつけて行くという展開の作品を見出すことができる。

以下に掲げるのは、「新樂府」五十篇のうちの第十「大行路」（『白氏文集』卷三、0334）である。この作品は、序に「大行路、借夫婦以諷君臣不終（大行路は、夫婦に借て君臣の終へざることを諷せり）」とあることから、良好な君臣関係を最後まで保ち続けることの難しさを、夫婦関係になぞらえながら明らかにすることを意図して作られたものと考えられる。

大行之路能摧車、
大行之路 能く車を摧く、

若比人心是夷途。
若し人の心に比ぶれば是れは夷らかなる途なり。

巫峽之水能覆舟、
巫峽の水 能く舟を覆す、

若比人心是安流。
若し人の心に比ぶれば是れは安かなる流なり。

人心好惡苦不常、
人の心の好惡 常なきことを苦しむ、

好生毛羽惡生瘡。

与君結髮未五載、

忽從牛女為參商。

古称色衰相棄背、

當時美人猶怨悔。

何況如今鸞鏡中、

妾顏未改君心改。

為君薰衣裳、

君聞蘭麝不馨香。

為君事容飾、

君看金翠無顏色。

行路難、難重陳、

人生莫作婦人身、

百年苦樂由他人。

行路難、

難於山、嶮於水、

不独人家夫与妻。

好むときは毛羽を生し 惡むときは瘡を生す。

君がために髪を結んで五載ならざるに、

忽ちに牛女に従ひて參商と為る。

古へに称へらく色衰へて相ひ棄たられ背くと、

當時の美人 猶ほ怨み悔いき。

何に況んや如今鸞鏡の中に、

妾が顔 改まらざるに君が心 改まりぬ。

君が為に衣裳に薰すれども、

君 蘭麝を聞きながら馨香せず。

君が為に容飾を事とすれども、

君 金翠を看て顔色無しとおもへり。

行路の難きこと、重ねて陳し難し、

人生れて婦人の身作ること莫れ、

百年の苦樂 他人に由れり。

行路の難きこと、

山よりも難く、水よりも嶮なり、

独り人家の夫と妻とのみにしもあらず。

「(第一段)」

「(第二段)」

近代君臣亦如此、

近代の君臣 亦た此くの如し、

君不見、

君見ずや、

左納言右内史、

左納言右内史の、

朝承恩暮賜死。

あした うけたまは ゆふ
朝に恩を承て暮べに死を賜れることを。

行路難、

行路の難きこと、

不在水、不在山、

水にしも在らず山にしも在らず、

只在人情反覆間。

只だ人の情の反覆あひたの間に在り。

「(第三段)」

この詩において表現される悲哀の情は、夫の愛情を失った妻の嘆きである。掲出の本文に既に示したとおり、ここでは全体を大きく三段に分けて考察してみたい。第一段のうち、最初の「大行之路能摧車、若比人心是夷途」から「人心好悪苦不常、好生毛羽惡生瘡」までは、人の心が移ろいやすいもので、そうした心の移ろいやすさに比べれば、大行山の山道の險しさや巫峡の谷川の激しさですら穏やかだということをいうもの。その上で婦人の立場から「与君結髮未五載、忽従牛女為參商」と、結婚して五年もたたないうちに夫の気持ちが離れてしまったと嘆く。「牛女」は牽牛織女、「參商」は參星と商星。第二段ではまず、夫の心変わりについて、それがどのようなものかを具体的に描く。すなわち、自分の容姿が衰えないうちに夫の愛を失ったこと、自分がいくら身なりを整えても夫は自分に興味を示さないことをいう。その上で「人生莫作婦人身、百年苦樂由他人」と、自らの悲嘆の背景に、夫にその生き方が左右されてしまう婦人の境遇を見る。以上、第二段までは、夫の愛情を失った婦人の視点から、その悲嘆が述べられている。第三段に至り、他人に自らの生き方が左右されるのは夫婦関係におけ

る妻に限ったことではないとし（「不独人家夫与妻」、当時の君臣関係がこの場合の夫婦関係と同様であるとする（「近代君臣亦如此」）。すなわち、夫に顧みられなくなった婦人の嘆きの背景に、夫から自立し得ない婦人の境遇を見、さらにそうした境遇が、険峻な山や激流に比してもなお、より変化しやすい夫の心情によるものであるとし、そうした婦人の境遇が、相手との関係性において、君主に顧みられなくなった臣下の境遇に重なるものと解釈される。最後の「不在水、不在山、只在人情反覆間」は、君主の心の様態を問題にしたものであろう。

ここで注目されるのは、第三段が、夫婦関係を君臣関係に置き換えて諷諭的に解釈する、その解釈の箇所にあった点である。「新樂府」中の各篇に諷諭の意図が示されているのは、序に「卒章顯其志、詩三百篇之義也」とあることによるものと考えられるが、加えて「大行路」の構成においては、悲嘆の表出が諷諭的な解釈へと帰着していく展開を見出すことができる。前に確認したように、本作品では、夫の愛情を失った婦人の嘆きの背景に、山道や激流以上に変化しやすく扱いづらい男性の気持ちを抛り所として生きねばならない婦人の不安定な境遇を見、さらにそうした婦人の境遇を臣下の境遇に重ねることで、君主の気分次第で臣下が死を賜ることの不合理を諷諭的に述べている。このように悲嘆の表出が諷諭的な解釈へと結びついていく展開は、「古詩十九首」のうちの特定の作品において、詩の本文で表出された悲嘆の感情が、注釈、特に五臣注によって諷諭的に解釈されていくその道程と等しいものと考ええる。無論、「新樂府」五十篇における悲嘆と諷諭との関係については、より精査を要するであろうが、「上陽白髮人」、「新豐折臂翁」、「馴犀」、「伝戎人」、「李夫人」、「陵園妾」などは、登場人物の悲嘆を描いた上で、そこに描かれた悲嘆が解釈され、諷諭へと結びついて行く展開を持つものと考えられる。

ここに至って、改めて新樂府序の「首句標其目、古十九首之例也」の本文に立ち戻り、ここでの「古詩十九首」への言及の背景を考えてみるならば、古詩における悲嘆の表出が諷諭的な解釈に帰着する道程をその背景として想定できると考える。そして、白居易がそうした道程を『文選』に収載された「古詩十九首」およびその注釈、特に五臣注に学んだことを推測することができよう。いうなれば白居易は、そうした道程を五臣注に学び、「新樂府」の作成において、悲嘆の表出から諷諭的な発想へと作品を展開させる、展開のための手法として用いたことになるう。

おわりに

本稿では、新樂府序の「首句標其目、古十九首之例也」の記述を起点として、「古詩十九首」が『文選』注釈、特に五臣注において諷諭的に解釈される点について考察し、さらにそうした「古詩十九首」の諷諭的な解釈が詩の本文に表出された悲嘆を解釈することで成されるものであることを確認した。また、悲嘆の表出から諷諭的な解釈へと帰着していく道程が、「新樂府」において作品を展開させるための手法として取り入れられている可能性を指摘した。もちろん、そもそも古詩の抒情性が『毛詩』『国風』の系譜上に据えられるものだと考えれば、「新樂府」における悲嘆から諷諭への展開についてもまた、『毛詩』を念頭に置けばよく、「古詩十九首」をその背景に想定する必要性はそれほど大きくないとする見方も可能であろう。確かにそうした見方もできようが、吉川幸次郎氏が以下のように述べる、『毛詩』から漢代の五言古詩への（抒情という側面における）変化を

改めて視野に入れば、「古詩十九首」に描かれた悲嘆・悲哀が「新樂府」に与えた影響の重要性を想定できるのではないかと考える。

漢の無名氏の抒情詩は、「詩経」に比して、外形的にも内容的にも、大きな飛躍を示している。まず形式的には、一句四言という「詩経」の退屈なりズムを脱却して、五言ないしは七言という活潑なりズムを生んでいる。更にまた内容的には、人間のせおっている運命に対する悲しみ、或いはそれに反撥した快樂への追求、いずれも「詩経」ではまだ顕著でない主題を、主題とするに至っている。やがて次の三国の時代になると、曹操以下の知名人が、これら漢の無名氏の抒情詩にまねた作品をみずからの文学とするのであり、それ以後の中国の詩は、外形的にも内容的にも、この流れを主流とするのであるが、かく後世の詩の主流となるもの、それを早い時代に於いて、隠微に準備したのが、漢の世の無名の詩人たちであった。⁽¹⁶⁾

さらに、「古詩十九首」をめぐるのは、白居易の諷諭詩の中に、「古詩十九首」を継承して作られたと考えられる「続古詩十首」があることも注目される。またその一方で、白居易の四分類の一つである感傷詩についても、「古詩十九首」の表現の利用が顕著に窺われる。こうした視点からは、「感傷」という分類そのものについて（ひいては感傷詩と諷諭詩との関係について）見直す必要性が浮上しよう。⁽¹⁷⁾

「古詩十九首」の主題や表現が白詩に与えた影響について、五臣注の解釈を念頭に、今後改めて考察する必要があると考える。

(注)

(1) 「新樂府」は、旧鈔本・刊本の別を問わず、多くの諸本において、元和四年（八〇九）の年記を有するが、下定雅弘氏は台湾国立中央図書館蔵「白氏諷諫」（明正徳年間四川布政司参政曾大有重刊本）をはじめとする諷諫本の新樂府序に「元和壬辰冬長至日右拾遺兼翰林學士白居易撰」とあるのを重視し、「新樂府」五十篇の完成を元和七年、白居易が下邳に退去中のときのこととする（下定雅弘『白氏文集を読む』勉誠社、一九九六年、前編第一章「諷諭詩——「新樂府」五十章の成立をめぐって——」）。

(2) 「新樂府」の本文は、神田喜一郎氏旧蔵嘉承二年藤原知明書写本の影印（太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』勉誠社、一九八二年）による。訓読については、原則として同書におけるラコト点及び第一次仮名（主に右傍訓）によって示した。

(3) 旧鈔本以外では、諷諫本系統の諸本、慶安刊本（慶安三年片山舎正刊「新樂府」）が旧鈔本に同じく「古十九首之例也」の本文を持つ（ただし清光緒十九年景宋刊本は「十九」を「十有九」に作る）（太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究（中巻）』勉誠社、一九九七年、第三章六(1)「台湾国立中央図書館白氏諷諫明刊本」、初出は一九七八年）。なお、曾大有重刊本の本文は前掲注(1)論文掲載の書影によっても確認できる。鈴木虎雄「白樂天新樂府校勘記」（『業間録』弘文堂書房、一九二八年）は、この七字について「有者是也」とし、これに対して陳寅恪『元白詩箋証稿』（『陳寅恪文集』六、上海古籍出版社、一九八二年）は、「首句標其目」も「詩三百篇之義也」にかかるべきだとして「鈴木之說殊未諦」とする。一方、那波本を底本とする平岡武夫・今井清校定本（京都大学人文科学研究所、一九七一年）は、旧鈔本により「古十九首之例也」を補入する。

(4) 太田次男「神田本白氏文集の研究——本文を中心にして——」（前掲注(2)書所収）。なお、太田氏は、各篇に冠せ

られる題がなければ、新樂府序にある題、各篇に冠せられた題、各篇の冒頭の句との三箇所にわたる重複が少なくとも一箇所は減少することを指摘する。また、太田氏は、新樂府序に「古十九首之例也」とある点について、「実内容を論ずれば、成程、古詩十九首の例は詩経の内に、既に抱含されているといえないこともないが、ここでは、「其目」「其志」を分けて、一歩々々説き進められるのであって、このとき、十九首のイメージと詩経のそれとは、自づから別個のものをもち、具体的なふくらみを持たせたものではなからうか」と述べる。さらに氏は、各篇の題および題序は、新樂府序の作成当時には無かったものが、後に白居易自身の手で加えられたものと推測する。なお、題および題序の体裁については「白氏新樂府序について——旧鈔本・刊本の本文よりみて——」（『白居易研究年報』第五号、勉誠出版、二〇〇四年）でも同様の見解が示されている。

(5) 白居易の「新樂府」五十篇のうちの十二篇の題は、元稹の「和李校書新題樂府」十二篇の題に一致する。まず李紳の「新題樂府」二十篇が作成され、そのうちの十二篇に元稹が和し、その後、白居易が元稹の十二篇に和すとも自ら作った三十八篇を加えて「新樂府」五十篇を成したと考えられる。花房英樹『白居易研究』（世界思想社、一九七一年）ほか。

(6) 『詩品』の本文は、荒井健・興膳宏『中国文明選第十三卷 文学論集』（朝日出版社、一九七二年）による。

(7) 前掲注（6）書。

(8) 吉川幸次郎「推移の悲哀——古詩十九首の主題——」（『吉川幸次郎全集』第六卷、筑摩書房、一九七四年、初出一九五九—六一年）、鈴木修次『漢魏詩の研究』（大修館書店、一九六七年）など。

(9) 「諷諭」の語の用例として「或以抒下情而通諷諭」（『文選』卷一、班固「兩都賦序」）とあるのが知られる。本稿では「諷諭」の語をできるだけ広く捉え、「社会や人間関係における何らかの事象について、それを韻文など

によって表現することで、その事象に対する見解（多くの場合には弱者の立場から見た考え）をそれとなく遠回しに提示すること」と考えておく。

- (10) 「文選集注」百二十巻のうち、「古詩十九首」は巻五十七に収められていたことが推測されるが、この箇所は現存を確認できない。

- (11) 『文選』および李善注の本文は胡刻本（中華書局、一九七七年）により、五臣注本との異同がある場合には本文の右に（ ）に入れて注記した。五臣注の本文は足利学校所藏南宋明州刊六臣注本（汲古書院）による。「古詩十九首」の各詩は詩題を持たないので、本稿に掲出する際は（ ）を附して第一句を示した。

- (12) 其四（今日良宴会）について五臣注は「此詩賢人宴會樂_レ和平之時_一、而志欲_レ仕_一」（呂向注）とする。其十（迢迢牽牛星）について五臣注は「牽牛織女星夫婦道也。常阻_レ河漢_一不得_レ相親_一。此以_レ夫喻_レ君、婦喻_レ臣、言臣有_二才能_一不得_レ事_レ君而為_二讒邪_一所_レ隔亦如_二織女阻_二其歡情_一也」（呂延濟注）とする。其十二（東城高且長）について、五臣注は「此詩刺_下小人在_レ位擁_二蔽君明_一、賢人不得_レ進也」（張銑注）とする。

- (13) 五臣のうちの呂向の名が「新樂府」五十篇のうちの第七「上陽白髮人」（『白氏文集』卷三、0131）に「君不見、昔時呂向美人賦、又不見、今日上陽白髮歌」と見え、その自注には「天宝末、有_下密採_二艷色_一者_上、當時号为_二花鳥使_一」。呂向獻_二美人賦_一以_レ諷_レ之_一とある。『文苑英華』卷九十六に「美人賦」を収録する。

- (14) 前掲注（8）両書。

- (15) 「抒情」をめぐるのは、陸機「文賦」（『文選』卷十七）に「詩緣情而綺靡」と見える「縁情」をめぐる問題とも関わりを持つと考えられる。「縁情」については、福井佳夫「六朝の文学用語に関する一考察——「縁情」を中心に——」（『中国中世文学研究』第六十三・第六十四号、二〇一四年九月）。また、六朝文学における「情」と「志」の問題

については林田愼之助「漢魏六朝文学論に現れた情と志の問題」(『中国中世文学評論史』創文社、一九七九年、初出は一九六四年)。

(16) 吉川幸次郎「古香爐詩」(『吉川幸次郎全集』第六卷、筑摩書房、一九七四年、初出は一九五三年)。

(17) 川合康三氏は感傷詩を「従来のに沿った抒情詩」とする(『白樂天―官と隱のはざま』岩波書店、二〇一〇年)。

(付記) 成稿にあたり、佐藤道生氏より重要なご意見をいただきました。記して謝意を表します。